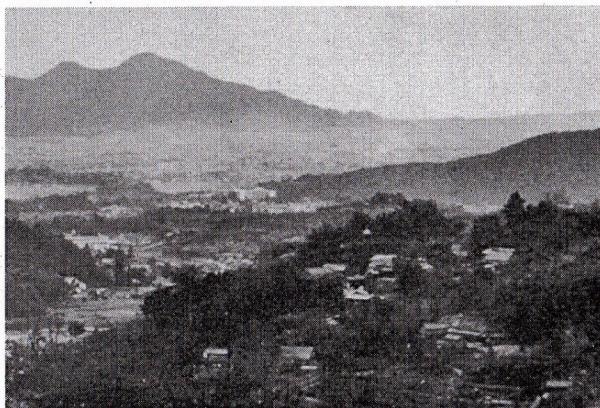


神社から多へ向かう途次に、こんな話をしている。
堀内は、その日の折口を「車の窓の、まぶしい光に、かつきりと浮ぶあめのふたかみのすがた」を見据ゑるやうになつて、もうおつしやつた」と述懐し、「昔の人が旅から、ちかに感じとつたことは、（上山の）の双峯の凹みのかくれてゐるところに、ほとのかみを祀つたといふことだね」（傍尾・原文）と折口の言葉を添えてい る。（「多の村」、「新大和道空手」、『道空研究』第二号所収、



二上山・畝傍山遠望（『大和万葉—その歌の風土』堀内民一より）

5

民俗通信

□261□
けましたのは、昭和八年
であります」（「第二回
国学院大学大和古典夏

小さた雑誌に詠され
た、このよつた会話は、
今まで多くの人の心にど
められずに過ぎてきただ
かもしえない。そして、
堀内民一といふ控えめで
静かな人であつたその人
の名前もまた。

「堀内巨一」の大和ふかみ
「(大和の西方に住む人びとは)ひつじざる(西南)の風がこわい」といつてこの暴風をおそれたが、その風の吹きくる方角に「上山」が見えれる方角に「上山」が見えれる、と堀内民一は記す。

郷愁呼び起こす一上山

て、ひとりなりけり。は
ろばろに天一上嶽（あめ
ふたかみだけ）見ゆ。葛
城も見ゆ」と歌つた折口
の大和は、堀内にもまた
産土（うぶすな）の地で
あつたのだ。

（一）年、国学院大学予科に入学する。

▼生活の中の「万葉」

「古墳（ふるつか）のくぼみをゆくと春の日
の照りたまりつゝさびしかりけり」と、「鳥船
（折口信夫主宰、第五選集）に歌つた堀内の万葉
は大和に生きた人ならではの生活の中にある。
堀内は、二上山を望む

あるいはまた、旧暦三月二十三日の「蠍(だけ)のぼり」の日に、二上山の谷に下りて採つた虎杖(いたぢ)の茎には白蛇が宿るのだと騒かされつゝ、小刀を入れると、ちょうどそれが風車のような形になるのを樂しくだらうと回想している。春分と秋分の日に、大和国(くんだが)の土地びとが、その二つの峯の間に日が沈むのを拝むという「二上山にいだく久しい生活の思い」を壇内もまた少年の日の記憶とともに、自身のうちに育んでいったのである。

上山を越えて、いざ。
も彼を誘つて河内から
初瀬川水上の磯城郡上之郷。
堀内民一の母の里は、
都美村の学校を出ていた
都美村の学校を出ていた
堀内民一（1912～
1971年）、国文学者、
文学博士。
（詩人、奈良民俗文化
研究所研究員）

城商学人文科学特集】第十九巻)
大和傍丘の里を歩きながら、師である折口の「土
岡をこえて行く道」であります。地理的感覚を空に描き、足でたどる楽しさをいくつもさぼるように読んだという彼は、帰つて来て自身もまたその道を歩いている。
「斑鳩からななめに傍岡をこえて行く道である。(略)雲がもえ空が赫々(あかあか)と映えるのである。母の背越しに見た真赤な二上の秋の夕雲の怖ろしさは、今も私の心にある」とも言う
堀内は、奈良県北葛城郡河合村佐味田(さみた)に生まれた。「のぼり来

▼母の在所 もう一度、冒頭の「会話に戻る。」志都美(しゆみ)の村だったね。見はらしの利く丘のあるある所」尼寺(にんじ)では、「さしませんか」「あそこはあんたの近くか」「はあ、すぐ近い西の村です」。折口信夫は「海やまのあひだ」に自身が「大和傍丘の洪一の家のやどる」と題して歌った在所のことを言つてゐる。

「秋たぬ。荒涼(すうりょう)す(さむ)さを戸によれば、枯れ野におつる鶴(つる)のひとむれ」。折口が明治三七年、天王寺中学校の同窓であつた吉村を志都美村に訪ねたときの歌である。

城商学人文科学特集』第
十九卷

大和傍丘の里を歩きなが
ら、師である所」の「止

う。

も彼を誘って河内から
上山を越えている。
堀内民一の母の里は、
初瀬川水上の磯城郡上之郷。
そして、よけいごとを
一つ記すことをお許しい
ただければ、わたしの母
は「尼寺」という在所で生
まれ、吉村洪一が教鞭
（べん）をとつたといふ志
都美村の学校を出てい
る。

堀内民一（1912～
1971年）、国文学者、
文学博士。

(詩人、奈良民俗文化研究所研究員)